

自著紹介

日本の文脈とユダヤの文脈から考える「日猶同祖論」

筑波大学名誉教授 津城寛文

著者の立ち位置

昨年末、『日猶同祖論——「失われた十部族」預言への応答』を刊行しました（津城匡徹名義、パブファンセルフより）。お目通しくださったアラブ調査室長の塩尻和子先生より、調査室のホームページで自著の紹介をしてはどうか、というご提案をいただきました。しかし「アラブ調査」とはまったく畑違いの人間ですので、「自著」紹介の前に、まず簡単な「自己」紹介をさせていただきたいと思います。

私は塩尻先生と、東大大学院の宗教学研究室の同窓で、「専門」は、広くいえば「宗教学」、時代や地域で限定すれば、「近代日本」の神道系新宗教、民衆宗教、といったあたりになり、修士論文では、大本系新宗教や、折口信夫研究を扱いました（のちにそれぞれ単行本化。津城、1990a、津城 1990b）。その後、テーマとしては、一方では近代スピリチュアリズム・心霊研究、他方では、公共宗教に軸足を置き（津城、2005a。津城、2005b。津城、2011）、また日本研究として、新京都学派の大先生たちが提唱された「深層文化」論を整理したり、最近では初期設定としての深層文化から立ち上がって高度なレベルに達したものを、「頂点文化」と名づけて、著書にまとめたり、自ら実践（和歌＝古語短歌）してきました（津城、1995。日守、2019a。日守、2019b。津城、2021）。

このように、研究者としては、アラブ研究、中東研究、セム系一神教研究とは遠い位置にありますが、日本の一教養人として、聖書は折にふれて読むことがあり、歴史的なユダヤ・キリスト教・イスラームの聖者や神秘家（アッシジの聖フランシス、ルーミーなど）の言行、とくに日本のキリスト者（川合信水、吉田清太郎など）の言行を、インドや日本の聖賢（ラーマクリシュナ、盤珪など）の言行ともども、深い関心をもって、学んできました。

課題の設定、主題のつなげ方

私が「日猶同祖論」に関心を持つようになったきっかけは、具体的には、大本教の出口王仁三郎とその周辺の発言のなかに、「神の経綸」が説かれる文脈で、日本とユダヤの関係が唐突に出てくるのを目にして以来です。関心を広げていくプロセスで、さまざまな「歴史の神」の声に混ざって、このような日猶論も現実政治のなかにかすかに響いているのがわかりました。この話題が活発だったのは、日本が世界史の最前線に、主要なプレイヤーとして参加した時代であり、そこでは歴史や民族や「人種」の思想が、現実政治を大きく動かしていました。ただし、日韓（鮮）同祖論や南島論が植民地主義イデオロギーにもなったのと比べ、日猶同祖論は歴史地理的なあまりの遠さから、ほとんど政治の口実になりませんでした。

「日猶同祖論」は、日本人とユダヤ人が系譜関係にある、という、一九世紀後半から語られるようになった言説で、「日本」と「ユダヤ」という二つの足場をもっているため、

日本研究だけでも、ユダヤ研究だけでも、カバーすることはできません。現代日本では、「都市伝説」「オカルト」「陰謀論」といったジャンルの周辺で、興味半分あるいは揶揄的に論じられておりますが、私はこれを、日本研究とユダヤ研究を結びつけることで、正当な学術的課題にできるのではないかと考えておりました。

日本研究においては、人類の発祥地から離れた日本列島に、いつどのようなルートで現在の日本人につながる集団が移入してきたかという、日本人「起源」論があります。世界中に離散したユダヤ人の一部が、その中に含まれていた可能性を考えることは、荒唐無稽ではありません。

ユダヤ研究はまったくの素人ですが、接点となるのは、「失われた十部族」説であろうと見当がつかしました。ここ一、二年、単著としてまとめていくプロセスで、「失われた十部族」というモチーフが、ユダヤ論のなかでしばしば言及され、学術論文のテーマにすらなっていることを、確認しました。これを効果的な接着剤として、特殊な立ち位置にある者として、日本とユダヤをつなぐ「現代の神話」が、世界全体の平和と人類全員の幸福にどう寄与しうるか、私なりの思考実験を試みました。僭越ながら、ユダヤ研究や中東研究専門の方々の死角になっているところに、ささやかな光を当てることができたのではないかと、とも思っております。

概要

「日本」「ユダヤ」の二語を入力してネット検索すると、冒頭から「日猶(ゆ)同祖論」に関するサイトが続出します。十年ほど前まで、ある「神道」関連書籍の売り上げランキング上位にも、日猶同祖論のテーマが入っていました。標準的な歴史学、地理学では対極にあるこの二つの語が、現代日本のサブカルチャーにおいてつながっているのは、説明を要する事態です。

こうした異説の種本となったのは、一九世紀後半、明治初期に来日したスコットランド人、ノーマン（あるいはニコラス）・マクレオド N. McLeod の著書『古代日本の縮図』（McLeod, 1875）です。そのサブテキストは旧約の「失われた十部族」預言であり、当時の観察と絡めて、日本人の一部は「イスラエルの失われた十部族」の末裔だと主張されました。

他方、2010年代のエンターテインメント界でのヒット作『ダ・ヴィンチ・コード』のサブテキストは、イエス（ユダ族）とマグダラのマリア（ベニヤミン族）の結婚伝承であり、このいわば「失われなかった二部族」説は、「失われた十部族」預言と割符の関係にあります。このように、日猶同祖論は日本発ではなく、ユダヤ・キリスト教世界発の異説と捉えると、世界神話の中の日本の布置が浮き彫りになってきます。

またこの異説は、現代および将来の国際政治にも接点があり、その扱いは「終末」の行く方に影響する可能性があります。西欧キリスト教世界の長きにわたるユダヤ人問題、イスラエル建国以来のパレスチナ問題、イスラーム世界との抗争、アメリカ合衆国におけるユダヤ勢力の問題など、政治・経済的合理性を超えた、終末神話に沿って世界史を動かそうとする勢力があり、その表舞台あるいは舞台裏への、預言されていた失われた部族の（再）登場の噂は、場面転換の合図となるかもしれません。

本書の推敲が最終段階になったところ、昨年（2023）10月、「つねに戦場」であったパレ

スチナ問題が、大きく再燃しました。校正、脱稿、刊行から、現在にいたるまで、紛争は継続中で、著書のなかで論じたことが、現実世界で起こっていることと響き合い、私のような者も、当事者意識を禁じえません。

現実的な結論

日猶関係の近さ（遠さ）については、イスラエルの十二部族の主要な一部が移住してきたというものから、断続的に少数の移住があったというものまで、論者によって所説に幅があります。また用語として、「日猶同祖」より、「ユダヤ人同化」、「ユダヤ人渡来」が相応しい、という説もあります。この事情は、戦後に大々的に発表されて、センセーションをひき起こした、いわゆる「騎馬民族」の「渡来」説や、「征服王朝」説と、似たところがあります。「騎馬民族」も「ユダヤ人」も、列島への「渡来」「移住」がゼロということはむしろありえず、歴史研究の対象とするならば、その渡来した人口の規模や、階層の構成、「定住」「同化」の歴史を、遺伝子の解析も含めて、再構成する必要があります。

世界中に離散したユダヤ人が、近親のセム系民族はもちろん、遠近の諸「民族」とまじりあって、その末裔が、「人種」的には異なってみえる「白人」や「黒人」や「東アジア人」となって、各地に同化していることは、一般論として確かなようです。他方で、世界中から諸民族が流入してきた日本列島に、その末裔がいることは、確率論的に考えても大いにありうることです。

本書の結論は、「おわりに」の数ページで簡単に述べたとおりです。世界の平和、人類の幸福を願う者は、誰であれ、まずは祖国のために、そのうえで世界全体、人類全員のため、近きから遠きにという優先順位をもって、地上の生活を送っています。今われわれが目目の当たりにしている紛争の当事者（表向きの、あるいは背後、およびその周辺の）が、潜在意識と現実政治に絡めとられているとすれば、和平への働きは、それぞれの内部の回心者か、あるいは外部の改革者かが、引き受けることになります。歴史・地理的に遠いと思われていた日本人とユダヤ人が、もし近い関係にあったとしたら、関心の度合いは高まらざるをえず、ある種の当事者として、関与せざるをえなくなるかもしれません。

日本人論とエズラのビジョン

歴史研究、現代研究の一つとしての遺伝子研究で、ホルモン分泌に関して、日本人を含む（東）アジア人は、危機的状態、闘争状態において、攻撃的になるよりは、回避的、融和的な対応を導きやすい遺伝子をもった人が多い、という研究報告があります。そのような遺伝子をもった集団が、チベットと日本にとくに多いとされるのは、戦争を好まない人々が、文明が興亡する旧大陸の中心から逃れて、西に向かってではなく東に向かって、海の果ての島々、山の頂上といった、それ以上は進めないところに辿りついて、隔離された狭い地域で、戦争を避ける仕組みを工夫して、生きのびてきたのだろう、と説明されます。ある時期の日本列島やチベット高原は、まさに戦争放棄者の避難所でした。

他方、東アジアを含む世界各地において、稀にしかみられない Y 染色体が、日本列島とチベットや、中東・北アフリカに共有されている、という研究報告もあります。

遺伝子に関するこの二つの説をつなぎあわせると、いつの時代（数万年前、数千年前、千年前、数百年前）か、北アフリカ、中東、東アジアを経て、そのどこかで、対決を回避

する行動を導きやすい遺伝子と結びついて、融和的な性格、行動をもった人々となった集団が、日本列島に渡来し定住した、というストーリーを描くことができます。これは、旧約預言に由来する神話、伝承とも重なるシナリオです。

旧約聖書「続編」あるいは「外典」「第二正典」に含まれ、「第四エズラ書」「エズラ書（ラテン語）」などと呼ばれる、ややマイナーな預言書があります。この「最古の資料を含む」とされる文書は、主要部分が「エズラの黙示」と呼ばれ、「七つの異象（まぼろし）」から成り立っています。その第六のビジョンで、「至高者が何代もの長い間とおかれた人」に率いられて出現する「一群のおだやかな人びと」「平和な群衆」が、失われた十部族（写本によっては九部族）の末裔であるとされています。

聖書をよく読まれる方でも、馴染みのない方がおられるかもしれませんので、関根正雄先生の翻訳から、ハイライトシーンをつなげてみます。

七日たって、わたしは夜、夢を見た。海から一陣の風がおこって波浪をかき立てた。わたしが見ていると、この風が海のまん中から、人間の形をした者を立ち上がらせた。なおつづけて見ているうちに、みよ、この人は雲にのってとんで来るではないか。……そののちにわたしはこの同じ人が山から下りてきて一群の人びとをよびあつめるのを見たが、この人びとはおだやかな人びとであった。……

さて、この幻の意味を解いてあげよう。海の中から立ちあがって来たあの人こそは、至高者が何代もの長い間とおかれた人なのだ。……お前の見た別の一群のおだやかな人びとのことだが、これらはホセア王の時代に捕囚となってひいてゆかれた十の部族なのだ。……彼らはここに終末の時まで住んだが、いまやふたたび出て来る時がきた。

日本人は失われた十部族の末裔ではないか、とマクレオドが述べる時、そこで引用されていたのが、このエズラ書のビジョンでした。このような「おだやかな人々」「平和な群衆」は、多様なメンタリティ、多様な価値観がせめぎ合う過酷な終末の世界に出てきて、どのような生き方をすることになるでしょうか。

原典の「発見」

日猶同祖論の原典である、マクレオドの英文著書は、150年ほど前に長崎で印刷・公刊されて以来、ユダヤ知識人の関心を引いたとされています。日本語に翻訳されることはありませんでしたが、断片的に言及・引用されることで、日猶同祖論のスタイルを確立しました。「失われた部族捜索者」の一人マクレオドはそこで、日本人の風貌や風習、神道の建築や作法のなかに、古代ユダヤの痕跡があると主張していました。

日本語でだいたいの内容が読めるようになったのは、1987年に抄訳、1997年にその改訂版がでてからです。たとえば、「天皇こそ疑いもなくエフライムの家の長」「随行員は全員がユダヤ人の顔つき」「イスラエルの神殿と日本の神殿はともに幕屋の形」「神社には、今も契約の箱とそっくりの形をした箱が祀られている」「日本は良きにつけ、悪しきにつけ、昔のイスラエルの伝統をそっくり今に伝えている」などと述べられています（マクレオド、1997）。

原著は、十年、二十年前は、なかなか見つけられませんでした。あれこれ探しているうち、全国の大学で唯一、筑波大学の附属図書館に、一冊所蔵されているのを「発見」し、「灯台下暗し」のめぐり合いに驚きました。寸法はハガキ大、あるいはA6版と小さく、版組は細かく、拡大しないと読みにくいほどです。150年ほど前の本ではあり、崩壊寸前の状態で、乏しい研究費から学生アルバイトを雇って、慎重にコピーをとってもらいました。「東京師範学校図書印」が押された著書の扉ページの写真を、拙著の冒頭に掲載しました。1875年とあるように、これは初版本です。

現在は、ネット上のあちこちに、テキスト全文がPDFで公開されており、無料で読むことができます。便利な時代になりました。一次資料のつねとして、読みやすい本ではありませんが、ご関心のある方は、どうぞ挑戦なさってください。

目次の再録

概要では全体像が見えにくいと思いますので、章と節の目次を示しておきます。

『日猶同祖論——「失われた十部族」預言への応答』◇目次

はじめに

序章 一七世紀の日本とユダヤ・キリスト教世界

- 1 ジョアン・ロドリゲスの『日本教会史』
- 2 サバタイ・ツヴィと「失われた十部族」

1章 世界史の中心をめざす起源神話

- 1 近代知識人の日猶同祖論
- 2 新宗教の日猶同祖論
- 3 英猶同祖論——アングロ・サクソンの平行現象
- 4 ラスタファリアニズム——ジャマイカのエチオピアニズム
- 5 「失われた十部族」預言との対話
- 6 理想の選択、世界史の主役争い
- 7 日猶同祖論の位相

2章 現代日本から見る終末論

- 1 「陰謀」と戦略のあいだ
- 2 人間のシナリオと神のシナリオのあいだ
- 3 『黙示録』のシナリオ
- 4 「陰謀を無効化する日本」論
- 5 イエスの血統——聖杯伝説
- 6 日猶同祖論とイエスの血統——十二部族の割符
- 7 主題の重大性

3章 現代につながる関心

- 1 「失われた十部族」問題の現在
- 2 シオニズムと反シオニズム、改宗ユダヤ教徒と追放ユダヤ人、その他

4章 日本で発見されるユダヤの痕跡

- 1 ユダヤの遺伝子
- 2 ユダヤの図形

終章 二一世紀の日本と世界

- 1 世界が日本人に期待してくれていること
- 2 ユダヤ人が日本人に期待してくれていること
- 3 第二次世界大戦と日本
- 4 日本人論・再考
- 5 ユダヤ系であれ非ユダヤ系であれ、人類の一員として

おわりに

出版形態のご案内

なお参考までに、本書は、商業出版社や、大学出版会などからではなく、アマゾン提携のオンデマンド印刷出版で、刊行したものです。馴染みのない方法ですが、役に立つ方もおられるかと思しますので、ご案内いたします。

出版社名である「パブファンセルフ」（旧名「ネクパブ・オーサーズプレス」）は、「オーサー（著者）」が「セルフ（自身）」で出版する、「ネクスト（次世代）」の出版形態、という意味で、「名は体を表わす」どおりの社名です。周知のように、出版事情はもうずいぶん前から厳しく、出版業界も、売れそうなもの、助成金付きのもの、買い取りを条件にするものなど、苦勞しておられます。私の本は、そのどれでもないもので、数年前から、この形態で出すようになりました。ご近所の作家の方のアドバイスをいただいたお陰です。

これを「自主」出版と称しているのは、「自費（私費）」出版との違いを、よく表わしています。自費出版は、必要数を印刷してストックする必要がありますが、このオンデマンド印刷は、そのコストがゼロです。売れ行きが悪くて、出版社に迷惑をかけることもありません。このように、研究成果や作品を自由に公刊できるのは、退職後に発表の媒体が乏しくなった老人には、ありがたいことです。その意味では、いい時代になったと思います。

販売はほぼネット経由で、印刷版はアマゾンと楽天ブックスで、電子版はアマゾン専売となります。PDF でよろしければ、塩尻先生にご依頼いただき、塩尻先生から、あるいは私から、添付ファイルでお送りいたします。

参照

- 日守麟伍『古語短歌——日本の頂点文化』ネクパブ・オーサーズプレス、2019a
- 日守麟伍『くりふとむねじあ和歌集——言霊の森』ネクパブ・オーサーズプレス、2019b
- マクレオド、N.、高橋良典編著『天皇家とイスラエル十支族の真実——マックレオドの原典日ユ同祖論』たま出版、1997
- MCLEOD, N., *Epitome of the Ancient History of Japan*, Rising Sun Office, Nagasaki, Japan, 1875
- 津城寛文『鎮魂行法論——近代神道世界の霊魂論と身体論』春秋社、1990a（ネクパブ・オーサーズプレス、2022）
- 『折口信夫の鎮魂論——研究史的位相と歌人の身体感覚』春秋社、1990b（ネクパブ・オーサーズプレス、2022）
- 『日本の深層文化序説——三つの深層と宗教』玉川大学出版部、1995
- 『<霊>の探究——近代スピリチュアリズムと比較宗教学』春秋社、2005a（ネクパブ・オーサーズプレス、2022）
- 『<公共宗教>の光と影——近代日本という雛形』春秋社、2005b（ネクパブ・オーサーズプレス、2022）
- 『社会的宗教と他界的宗教のあいだ——見え隠れする死者』世界思想社、2011（ネクパブ・オーサーズプレス、2022）
- 『深層文化から頂点文化へ——発信する日本研究』ネクパブ・オーサーズプレス、2021
- 『無きものとされた近代知——死者とのコミュニケーション』ネクパブ・オーサーズプレス、2022
- 津城匡徹『日猶同祖論——「失われた十部族」への応答』パブファンセルフ、2023